

2018 年度秋セメスター 授業評価結果

1. 授業評価実施率

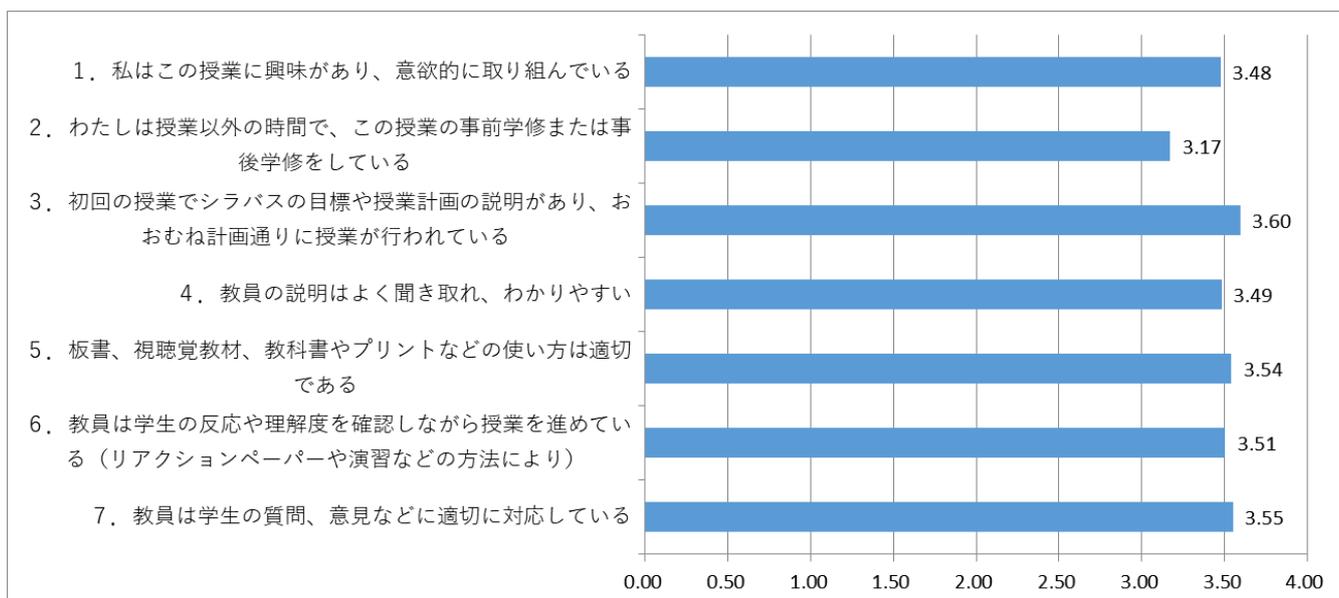
	対象科目数	実施科目数	実施率 ()は 18 春セメ実施率
共通科目	48	48	100% (100%)
看護学部	39	39	100% (100%)
社会福祉学部	62	62	100% (100%)
リハビリテーション学部	70	70	100% (100%)
計	219	219	100% (100%)

2018 年度春セメスターに続き実施率 100%となった。今後も 100%の実施となるように、教員はもちろんのこと、学生 FD スタッフにも協力を要請し推進していく。

2. 授業評価結果

評価票の評価について「そう思う」(4点)「ややそう思う」(3点)「あまりそう思わない」(2点)「そう思わない」(1点)と得点を与え、質問項目ごとに平均評定値を算出した(図1～図5)

図1 全科目における質問項目ごとの平均評定値



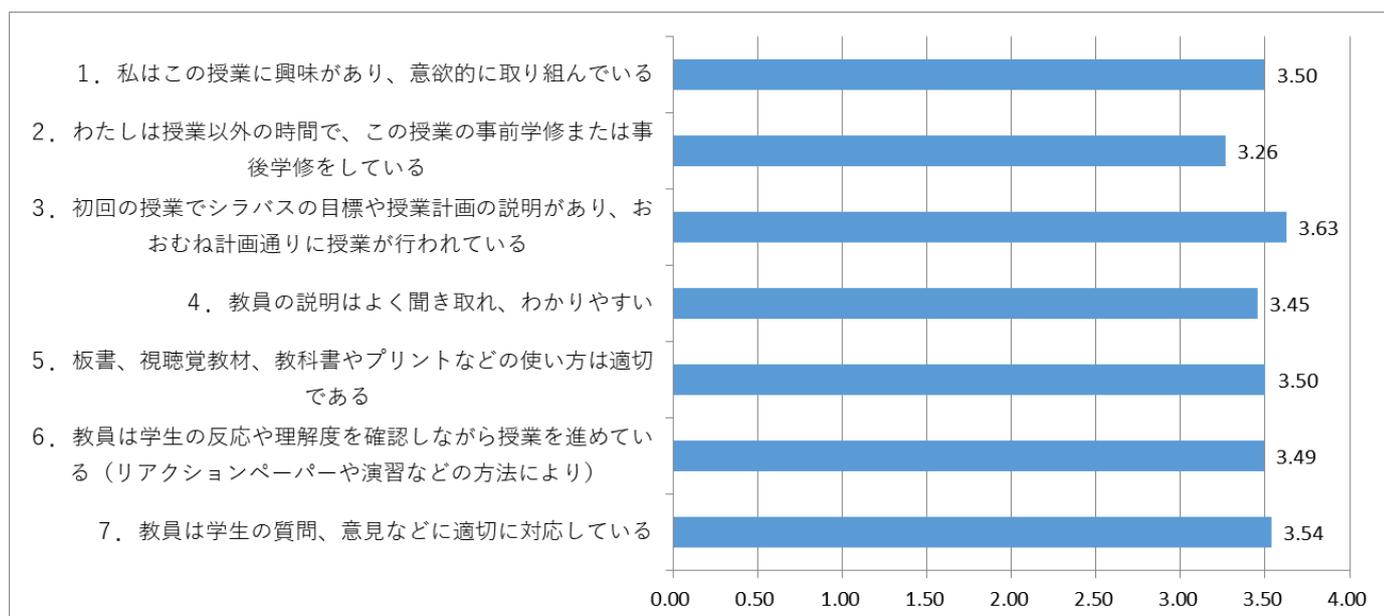
質問項目ごとの平均評定値の推移

質問	2015 秋	2016 秋	2017 秋	2018 秋
1	3.36	3.46	3.51	3.48
2	2.99	3.03	3.17	3.17
3	3.49	3.56	3.63	3.60
4	3.39	3.44	3.53	3.49
5	3.42	3.49	3.58	3.54
6	3.37	3.45	3.55	3.51
7	3.43	3.51	3.60	3.55

前年度より質問 2 以外は平均評定値が下がってはいるが、それほどの開きがあるわけではない。また、2015 年度からの 4 年間で比較すると、昨年度に続く評定値であり、この授業評価により授業改善が着実に推進されてきたと言えよう。特に、質問 2 については、他の質問より評定値は低いが、4 年間の伸びは最も高いものである。様々な方法で、事前・事後学修を採り入れてきた成果と言える。

2019 年度からは新たな内容・方法での授業評価となるが、これまで同様に授業改善に資するものとなるようにしていかなければならない。

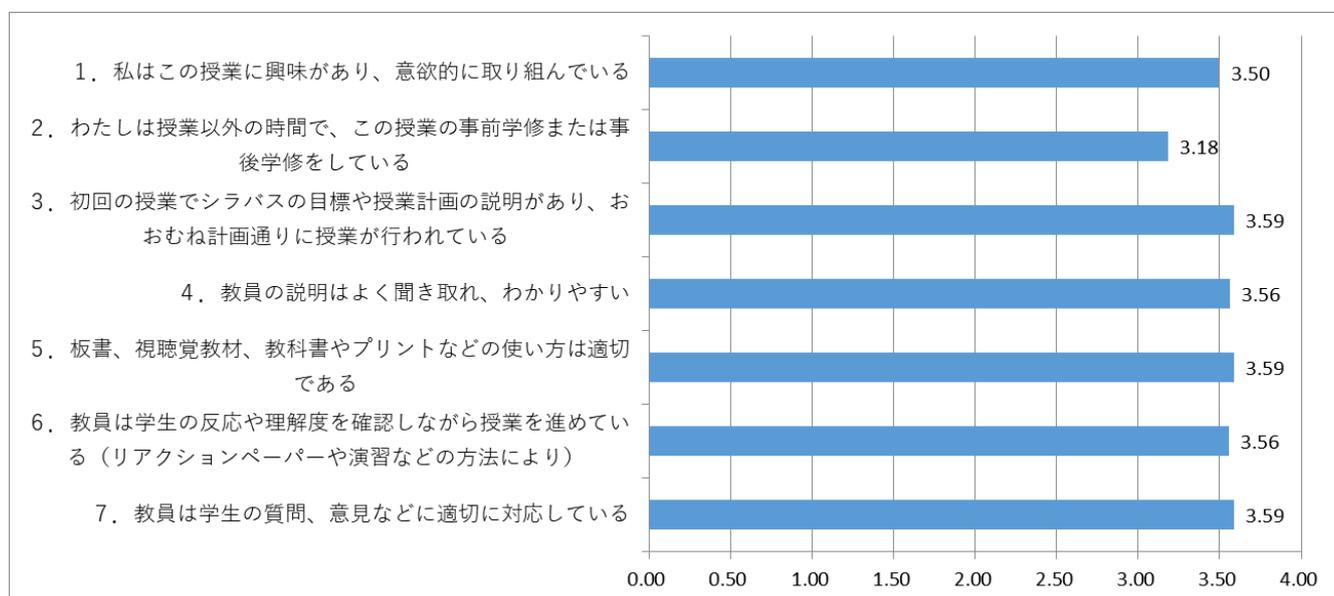
図2 看護学部における質問項目ごとの平均評定値



看護学部 FD 委員会のコメント

例年と比べ同様の傾向である。全学平均評定値と比べ、項目1と2が高いことから、学生の意欲的な学修への取り組みや積極的な事前・事後学修の取り組みが伺える。他の項目3～7については、多人数による教室での授業という学習環境によることもあり他学部と比較して低い傾向を示しているが、今後もFD活動（ピアレビューや研修等）を通し教授法や教材の工夫、向上に努めたい。

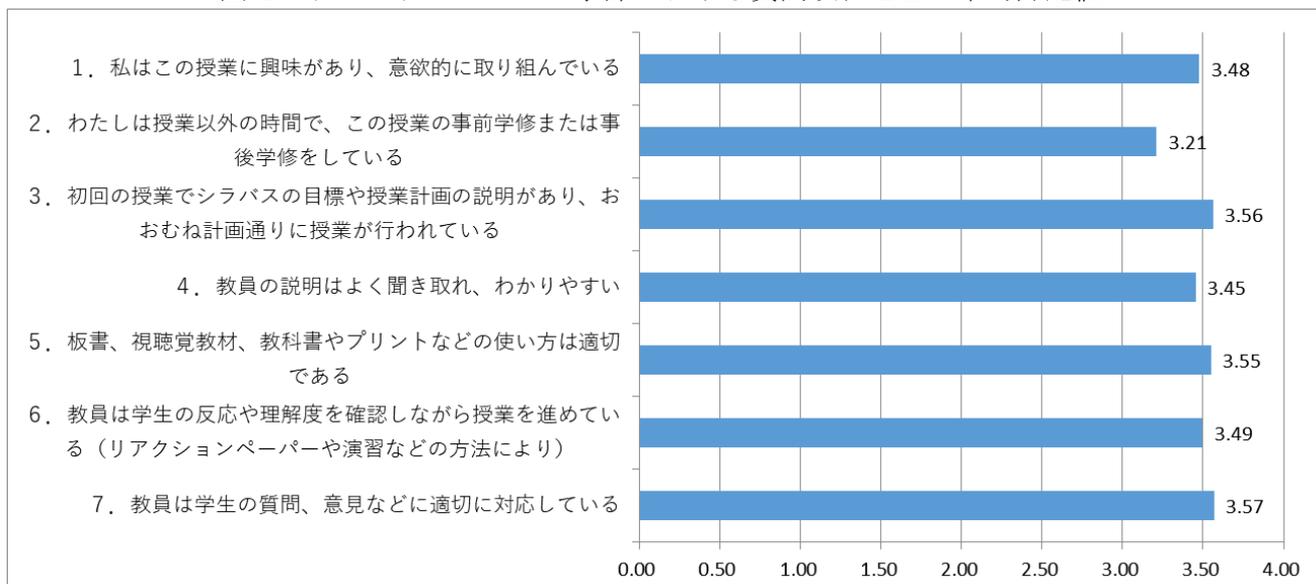
図3 社会福祉学部における質問項目ごとの平均評定値



社会福祉学部 FD 委員会のコメント

偏差も付加した値であればたとえば一般教養(共通)と専門に対する学生がもった印象の差異が見えるかもしれないが、平均評定値は概略3.5に集中しているので回答は「ややそう思う」か「そう思う」が大部分ということであろう。項目4は項目5, 6, 7の結果をまとめた意味を持ち、かつ回答順番で最初であるため、学生の回答時の心理作用を差し引いても、同一学部におけるこの項目4に現れた、絶対値ではなく、0.1の増減の推移にはある程度の意味付けができそうである。本学部の16年から17年に増加し、18年は維持したので概ね教員の発信と学生の受信の整合努力の結果ではないか。

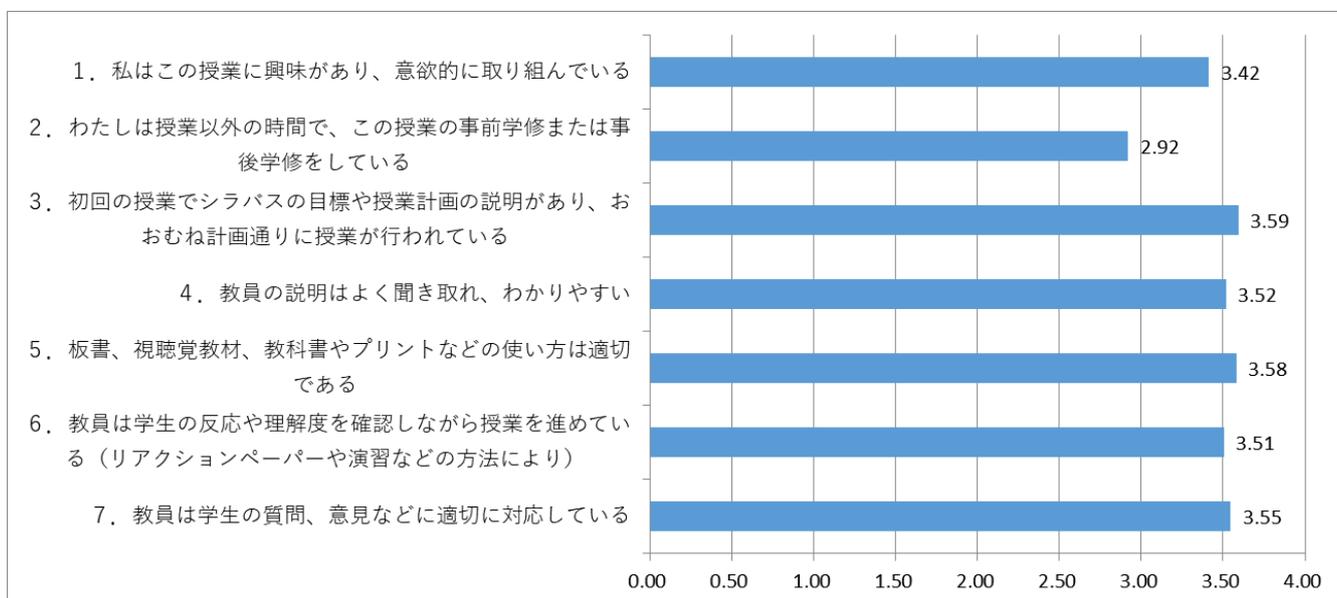
図4 リハビリテーション学部における質問項目ごとの平均評定値



リハビリテーション学部 FD 委員会のコメント

2018年度秋セメはすべての対象科目において授業評価を実施することができた。Q2以外の全ての質問項目において3.50ポイント前後となっており、まずまず良好な結果であったと言える。各教員が各々の授業形態に合わせ、学生にとってわかりやすく丁寧な授業づくりに取り組んだ成果であると考えられる。Q2の「事前事後学修の実施」については、まだ他と比べると低値となっている。2019年度FD活動としてもリーブリック評価、ポートフォリオ、反転事業等の質的な学修到達度理解や自己学修を充実するための手法の導入を推進しているため、さらに今後の改善を期待したい。

図5 教養・共通科目における質問項目ごとの平均評定値



教務部長のコメント

2018年度春セメスターに引き続き、秋セメスターにおいても対象科目全てで授業評価が実施されたことは、非常勤講師も含め教養・共通科目を担当する教員の授業評価への理解が進んでいる結果であると思われる。過去の平均評定値と比較すると各項目において上昇が見られ、シラバス内容の充実、授業内容や教材の工夫、さらに学生の反応や理解度を確認しながら授業が行われるなど教員の努力の結果と考えられる。6項目中最も低い、事前・事後学修の項目においても、過去と比較すると上昇が見られ、さらなる改善に努めてきたい。